

な、あるいは生活の場における月の歌がほとんど見られなくなった。この一首は、月だけをゆったりのびのびとうたっていて、心にとまった。「いつもより」とあるように「いつも」よく月を見ている作者なのだろうか。

消し忘れられたる文字を消し去りぬ臨時休校二日目の朝
の朝
田中拓也

新型コロナウイルスによる休校の歌。教員である作者は、臨時休校ながら出勤したのだろう。休日の校舎や教室の空気は独特だが、「臨時」の休校となるとまた心理的な要因も加わって、異空間のような気がするのかも知れない。そのあたりの、日常とはちがう空気を表現しようとしているようだ。

白菜の浅漬けに刻む唐辛子びりりと恥じたき思い出
もある
鈴木香代子

上句「白菜の浅漬けに刻む唐辛子」が「びりりと」を起こす序詞になっている。つまり、「びりりと」ひびくほど恥じたような、そんな思いもあるといった一首の意味になる。古典和歌の古いレトリックを楽しむことが少なくなった昨今、めずらしく序詞入りの一首に出あった。こういうレトリックも楽しんで、作歌の幅を豊かなものにするのに賛成。

百花園 御成座敷の縁側にほどよき陽ざし猫になり
たし
矢代朝子

向島の百花園にある御成座敷は、広大な庭のなかにある貸座敷。都会のオアシスのような静かさと清澄な空気が感じられる一首。冬の日射しならではのニュアンスを

表現した下句、うまい。

バケットにブルーチーズをのせましょう今日は蜂蜜
とろりとかけて
笠巻 睦

今月のこの作者の作はすべて食べ物の歌。ふつう食べ物の歌だと、つい季節感を表に出したりしがちだが、この作は日常の食事に取材して、かえって新鮮。

悪妻といわれしギーの亡き妻の写真は居間に寝室の
壁に
美帆シボ

従兄であるフランス人ギーにかかわる今月の七首。じつさいの人物を知らない私たち読者にも、物語を語りかけてくるような、興味深い世界にみちびいてくれる。故人となった悪妻の写真を各部屋に飾っている従兄のギー。次が読みたくなるような一首である。

「売り切れ」と書かれたる紙菱び居りロビーの百円
マスク自販機
高橋 秀

コロナウイルス騒ぎが長くつづいている折の、病院に勤務する作者が見た病院ロビー点景である。無いのが当然として今はもう誰も存在を忘れてしまっているような百円マスク自販機。地味だが、時事詠としての切れ味に注目したい。

思ひ出の五匹の猫の面影が起き臥しをする草深き庭
齋藤佐知子

すでもう死んでしまった五匹の猫たちの面影が起き臥しをする、というのである。「猫の面影が起き臥しをする」という表現が凄い。猫好きの作者ならではのイメー
ジだと思ふ。